

資料：高知ダルクによるゲストスピーチ逐語録

—高知リハビリテーション専門職大学「更生保護制度論」（2023年7月20日）—

加藤 誠之¹・高知ダルクの皆さん²

(¹高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門・²高知ダルク)

Document: A Literal Record of Guest Speeches by
the Members of Kochi DARC in “System of Probation and Parole”
(20th July 2023 at Kochi Professional University of Rehabilitation).

Masayuki Kato¹ and Members of Kochi DARC²

¹ *Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster
Education Unit;*

² *Kochi DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center)*

Abstract : We had guest speeches by the members of Kochi DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center) in “System of Probation and Parole“(20th July 2023 at Kochi Professional University of Rehabilitation). This document is the literal record of these guest speeches.

キーワード：自助グループ，薬物依存，実体験

Keywords : Self-Help Group, Drug Addiction, Actual Experience

第1章 はじめに

筆者（加藤）は2023年7月20日(木)に開講された高知リハビリテーション専門職大学「更生保護制度論」で薬物乱用経験者の自助グループ高知ダルク（DARC, Drug Addiction Rehabilitation Center）のメンバーをお招きし、ゲストスピーチを行っていただいた。本稿はこのゲストスピーチの逐語録である。聞き取れなかった箇所及びスピーチの趣旨を理解する上で必要のない箇所は「…（中略）…」とした。[]内の文言は筆者（加藤）による注又は補足である。

第2章 高知リハビリテーション専門職大学「更生保護制度論」（2023年7月20日）でのゲストスピーチ

【Aさん（女性）】

おばちゃんは17歳の高校生のときに覚せい剤を覚えました。高校の夏休み中のことで、その頃、就職先も決まっていたのですが、おばちゃんの家はすごく貧乏で、就職先の寮に入って給料が出るまでしのぐ金がないという理由で、キャバクラで年をごまかして勤め始めました。17歳の幼い会話になかなか客が付かなかったのですが、一人だけ、38歳の、私から見たらいわゆるおっちゃんの客が毎日、通ってくれるようになり、いつもスーツでびしっと決めたその客にだんだんとほれてしまい、数カ月の間にいわゆる男と女の関係になりました。そのときおばちゃんは水商売をやっている中身は高校生で、いわゆる初体験をその客としてしまいました。スーツを脱ぐと全身いれずみでしたが、もうその頃にはほれてめろめろになっていたのも、怖いとも後のことも全く考えずに男女の関係になったとき、ガラスのパイプを覚せい剤とライターでいわゆるあぶりという方法で初めて使用しました。初めてだったので、自分ではうまくいかずに口移しで煙を吸って、これが私の覚せい剤との出会いでした。あぶりでは効き方も弱く、苦痛の初体験でした。

その後、その男が極道で売人であることを知ったときには一緒に住んでいました。一緒に住み出してから注射器を使って腕に打ってもらうようになり、注射器を使うと毛穴がぶちぶちと開くような、目がぎらぎらするような感覚で、いわゆるキメセクを覚えてしまいました。その後は転がり落ちるように毎日、使うようになり、だらだらと毎日を過ごし、時間にも生活にもただただ覚せい剤を打ち続けていたら学生生活も仕事もどうでもよくなり、その男も最初は自由にさせていてくれましたが、行動の一部始終をチェックするようになり、四六時中、一緒に過ごさなければ納得しないようになりました。覚せい剤を配達するときも一緒、パケを詰めるときも一緒、組に取りに行くときも一緒。常に一緒に行動して、少しでも、買い物さえ一人で行かせ、行動することを許してくれなくなりました。毎日毎日、繰り返し使い続け、使って売り、昼夜逆転し、寝るのには大量の睡眠薬を服用し、一日中、覚せい剤を使い、次の日は大量の睡眠剤を使って眠り、また目覚めて使いという生活をしていました。

そんな生活が2年間続き、19歳のとき、彼が逮捕され、その頃は携帯電話もまだ普及していなくて、家でポケベル、手帳と自由を手に入れました。残されたもので自分が生活するため、覚せい剤を売るための足掛けとして、売人になりました。自分自身も覚せい剤を使い続け、毎日毎日シャブ漬けで、寂しさとむなしさの連続でした。彼が刑務所から出所するという話を聞いて、違う土地に逃げました。もうあんな生活は嫌だと逃げました。そのときは覚せい剤を断つつもりで逃げたのですが、新しい恋人や家庭を持っても何年たっても覚せい剤のあの感覚は忘れられず、また気が付いたら覚せい剤漬けの生活に戻り、使用、所持で34歳のとき逮捕され、刑務所に3年半勤め、最初の初犯のときは旦那も親きょうだいも待っていてくれたのですが、1年もたたずに2回目の刑務所

に行ったときには、何もかもなくしていました。その後、3回、4回と刑務所生活を送り、おばちゃんの30代、40代は、大半は刑務所で過ごしました。

4回目の刑務所を終えて、帰るところもなくなって、今のダルクにつながりました。ここで、自分が薬物依存症という病気で、その病気は治ることのない病気だということを知りました。薬物依存症とは治療法も薬もないのです。毎日、同様の依存症と闘う仲間と過ごし、ミーティングやプログラムをこなし、今日だけを続け、今、薬物を使わない生活が6年続いています。昔は捕まるのを恐れながら覚せい剤が止められず、生きているのか死んでいるのか、分からないような生活を送っていたけど、今は、道に咲く草花を見て季節を感じたり、母親との文通を楽しみにしたりして、警察を怖がらずに表を歩くことができるようになりました。

覚せい剤は自分自身一人では止められません。止めたとしても、一回味わってしまうと一生治らない薬物依存症という病に苦しみます。それでも止めたいという気持ちを持って仲間と分かち合うことによって回復が可能なることを知りました。10代からずっと30年間闘ってきたこの経験を皆さんに、苦しかったし、辛かったし、孤独だったと今日は伝えに来ました。ありがとうございました。

【サチさん（女性）】

皆さん、初めまして。アルコール依存症のサチといいます。アルコールもドラッグの一つに含まれるそうです。でも、アルコールは薬物と違って法律で禁止されているわけではないので、皆さんが思ってる以上にアルコール依存症の患者さんはこの世にあふれていると思います。私が入院していたアルコール治療の病院でも常に満床状態でした。私はもともとお酒が全く飲めない体質だったんですけれども、当時、結婚していて、旦那さんが板前さんだったんです。板前さんってものすごく気が短いんですよ。当時、私は働いていて、それから認知症の義理のおばあちゃんのお世話もして、お姑さんのお世話もして、自分の父親も末期がんだったんです。自分の父親の介護もして、もういっぱいいっぱいなのに、俺の世話もしろってさらに重圧が夫からかかってきて、そこに今度はだんだん暴力が加わってくるようになったんです。

昔、私の父が若いときに酔っ払って帯屋町を歩いていたときに2階の麻雀荘でけんかが起こって、中からいすを投げた人がいたんです。それでそのいすが投げられてガラスが下まで落ちてきて、アーケードの下をちょうど通りかかった父親の上に全部かぶって、父親は一瞬で血だらけになったんですね。けど、本人、酔っ払ってるから痛くないんですよ。で、自分の武勇伝みたいに語ってくるんですけど、「サチ、人間はな、酔っ払ったら全然痛くないんだ」って。当時の価格で60万っていう損害賠償をもらったんですけど、そのときの連れの友達が父親には一銭も渡さず、そのお金を持って沖縄に旅行に行行って土産を買って帰ってきたっていうお話を何回もされて、もうその話、聞き飽きたんだけどって思ったんですけど、夫の暴力がひどくなっていく中、その話をふと思い出して、最初、アルコール度3%のチューハイを恐る恐る買って見たんですね。飲んだことがないから、どんなもんか分からないし。でも、その3%でもすごいふわふわした気持ちになって、これ、本当に魔法の水だと思って。ちょうどその日も殴られたんですけど、痛みよりそのふわふわ感のほうがすごく気持ち良くて、痛くない、すごい、これ、本当に効くんだって。プラセボ効果も入ってたんだと思うんですけど、それからお酒にずぶずぶのめり込むようになって、3%じゃ効かない、次は5%にしよう。5%じゃ効かない、次は7%にしようって。

甘いチューハイから入って行って、今度はワインになりました。で、ワインのボトル1本じゃ効かなくなって、今度ワインボトル2本になりました。でも、自分がおかしいっていうことをそのときは全く気付かなかったんです。ワインボトル2本じゃ効かなくなって、今度、ワインボトル3本になりました。そうなってくると、意識はもうろうとしてるんですけど、やっぱり痛いんですよ。

顔もぼこぼこにはれ上がって、それをメイクで隠しながら職場にも出勤してました。私は鍼灸あんまの仕事をしてたので、多分、ここの皆さんとお仕事も近いと思います。それでも仕事に行っていました。ワイン3本じゃ効かなくなって、1日にワイン3本とウイスキー1本をラップ飲みで開けるようになりました。こうなるともう意識があるのかないのか分からないレベルになって。けど、うっすら、殴られてるときは痛いっていうのを覚えてるんですよ。で、ついに白ワイン3本とウイスキー2本をがぶ飲みして記憶を飛ばしてから寝るようになりました。当然、体はぼこぼこです。

ある日、胸をけり上げられて、私、そのときに心室細動を起こしてしまって心肺停止状態になりました。病院に運ばれて、いの一番に言われたことが、付き添いの夫から「俺がやったって口が裂けても言うんじゃねえぞ」っていう一言でした。ここにいたら殺されると思って、私、シェルターに逃げたんです。今まで自分がアルコール依存症になってたっていうことをそのときはまだ気付いてませんでした。だから、寝汗とか離脱症状がすごいんですよ、シェルターの中で。でも、自分がなんでそんなことになっているのかも分からないし。幻覚も幻聴もいっぱい見ました、聞きました。本当に怖かったです。この世にないものが、例えば、廊下からほうきが歩いてきて自分の部屋に入ってくるとか、それを追い掛けてちり取りがやってくるとか。本当に今では笑い話で、そういう病気の症状なんだなって分かるんですけど。洗面台がしゃべりだすとか、ベッドがマットと仲良くなって喧嘩してるとか、そういう幻聴も幻覚もたくさん見ました。その頃から、私、おかしいのかなって思い始めて。

それからシェルターを出て家で一人で暮らすようになったんですけど、1週間でものの見事に元に戻ってしまいました。自分一人の家に入ったのが11月の初めで、12月の終わりにはもう腹水までパンパンにたまるぐらいまで症状が悪化してました。これ、私、変だと思って自分で病院に行って「すみません、私、アルコール依存症みたいなんですけど、今から入院できますか」って聞いたら「依存症も何も、あなたは今すぐ入院です」って、 γ -GTPが1800か、ありますって言われて、即入院になりました。でも、入院生活してても誰もアルコール依存症に見えないんですよ。アルコール依存症ってもっとやばい人のイメージがあったのに、みんな普通の人で、朝から元気にラジオ体操してるんです。たまに院内飲酒しちゃう人がいるんですけど、そういう人、滑るっていう言い方をするんですけど、滑っちゃった人を見ると、この人、アルコール依存症だって分かるようになりました。当時の院長から、「アルコール依存症は回復します」って入院するときに断言されたんです。私、あほなんで、アルコール依存症って回復するんだって思い込んで。入院する期間3カ月あるんですけど、3カ月間は飲酒欲求は全く湧きませんでした。3カ月の、退院が終わって、一人暮らしに戻った瞬間にとてつもない飲酒欲求とむなしさが湧いてきて、どうして私、今、一人ぼっちなんだろうって。仕事も充実して家庭も持って今まで順調に生活してたのに、この寂しさはどこからくるんだろうって。そうすると、ものすごく飲みたくなって、冷や汗もだらだら流して、断酒会のチラシをずっと一晩中、眺めて。それでも我慢できないから、病院に電話をかけて「今、こんなに辛いんですけど、どうしたらいいでしょう」って、そんな夜中の2時に病棟に電話をかけてこられても看護師さんもすごい迷惑だったと思うんですけど、私にとったら生きるか死ぬかぐらいの問題だったんですよ、当時。あまりにもつら過ぎて、一人では乗り越えられないと思いました。で、「朝がきたら朝一で受診しに来てください」って言われて、朝一で号泣しながら受診しに行って、点滴打ってもらって、鎮静剤打ってもらって、薬を処方してもらって帰りました。それから地獄の禁断症状が続きました。

本当に、私、止めて5年になるんですけど、その5年の間にスリップしたのは1回だけです。最初の1カ月間でつら過ぎて、5%の男梅っていう焼酎を3分の1ぐらい飲んで。でも、もう元に戻りたくない、これじゃ駄目だと思って全部捨てて、また泣きながら病院に行って。そのときに主治医

にほめてもらえたんですよね。「よくそれぐらいで我慢できたね」って。その言葉にすがって何とか断酒 5 年目につながってます。

だから、皆さん、本当に、合法だからといってお酒をむやみやたらに飲むっていうのはすごく危ないです。退院してからもばたばた人が死んでいって。例えば、退院してから部屋で飲んで、朝起きたら野菜みたいに冷たくなってたっていう人が何人もいます。アルコールっていうのは本当に簡単に人の命を奪ってしまうんです。だから皆さん、アルコールの取り過ぎには本当に注意してください。依存症になってしまったら、終わりです。依存症になってしまうと、体にも影響が出てきて、私、がんになりました。がんになりやすい体質になってしまうんです。一度滑ると、脳が、酔っ払ったときの快楽物質を受け止める箇所っていうのを作ってしまっていて、また元の木阿弥になってしまうんです。アルコールはそれぐらい怖い物質です。以上です。ありがとうございました。

【マフネさん（男性）】

高知ダルクはさっき先生が説明してくれてましたけど、当事者が当事者を助けるっていうことが活動の真ん中にあるような団体で、僕も高知ダルクで職員やってますけど、当事者で薬物依存症です。僕が薬を初めて使ったのは。薬つつつてもね、さっきサチさんが言ってましたけど、お酒も含めると、もう中学生ぐらいのときから飲んでたんじゃないかなと思いますけどね。でも、そこから話し始めると 1 時間じゃ足りないんですよ。一番最初、お酒から始まって、とにかく若い頃からお酒を飲みだして、だんだんだんだん強い薬に変わって行って、最終的には非合法な薬にたどり着いて。東京に住んでたんですけど、もともとは。東京で、何歳ですかね。今、46 歳で 12 年前っていうと？…（中略）…33 歳か、じゃあ。33 歳ぐらいのときに東京で捕まりました。留置所に入ることになって、留置所から出て、その足で高知へ来ましたと。なんで高知へ来たのかっていうと、薬を使い続ける中で、何でもいいやとか、楽しいからいいやとか、今、仲間が話してくれたみたいに、痛み止めていうか。人生の苦しさから逃れるために使ってたっていう人もいますけど、罪悪感を持たずに薬を使っていたわけではなかったんで。これ、みんな、仲間たちはそうなんですけど。罪悪感を持ちながら薬を使うんですよ。こんなことしたら、まずいなとか、止めたほうがいいよとか。薬を使っておかしくなっている状態で携帯電話の電話帳を上から順番に見てって、こいつにも金借りた、こいつも連絡ができない、こいつも駄目だかっていって最後までいっちゃうような。そんな感じで、やっちゃ駄目なんだよなと思いつつながらやってるから、罪悪感があつて、罪悪感があるから、また使うっていう、そういうサイクルがあるんですよ、依存症者が薬を使い続ける中に。一般的にどうなのか知んないですけど、僕自身はそうだったんですよ。何の話してたんでしたっけね…（中略）…そう、罪悪感を持ちながら使ってたので、止めたいっていう気持ちはどこかにあったんですよ。何とかって名前あるらしいですけど。両個性っていうんでしたっけ？止めたいって気持ちと使いたいって気持ちと両方持って。だから、捕まって留置所に入ってる間にいったん薬が抜けたんで、これでもう止めれるかなって。このまま止めていけるかなって気持ちを持つと共に、そのときには既に親きょうだいとかとも連絡が取れなくなっていて。捕まることになったときに住んでた家も、同居人がいたんですけど、同居人が引き払っていて、帰るところもなかったんですよ。友達もいない。頼れる人はいない。で、着の身着のまま。持ってるものはびりびりに破れた紙袋だけだったんですけど。そこまで行ってんだけど、でも、俺はまた使うだろうなっていう気持ちがあつて。それはほぼ確信に近いっていうかね、確実に俺はまた使うなと思って、そういう自分に本当にうんざりしてました。

なので、高知へ来たっていう感じです。東京にいたら駄目だなと思って。とにかく人がいないところに行こうと思ったんですよ。人口が少ないところに行こうっていうか、田舎に行こうと思

ました。沖縄に行くか、高知へ行くかで迷って。沖縄、ちょっと、リゾート感があるから、なんていうか、ふざけてるなと思って。で、高知へ来ました。高知へ着いて駅前にあったビジネスホテルに1泊して、すごい量の酒を飲んで。その日はすごい飲みました。ビジネスホテルの部屋にこれぐらいの小さい机があるじゃないですか。その机の上にビールの缶が乗らないぐらい並んでました。でも、酔わなかったですけどね。そこに1泊して、両親に、何て言うんですか、自己哀惜っていうのかな、情けない手紙を書いて。で、次の日の朝、高知ダルクに電話したと。

今は高知ダルクは女性の施設で、利用者さんとか仲間たちはみんな女性なんですけど、当時は男性の施設もあったんですよ。当時、施設長が電話へ出てくれて、「今日から施設に入寮したいんですけど、大丈夫ですか」って言ったら、そんな感じでいきなり電話かけてくる奴なんていなかったみたいで、「ちょっと待ってくれよ、もう一回10分後ぐらいにかけ直してくれよ」って言って、がちゃって電話を切られて、10分後ぐらいに電話したら、「困ってる仲間を助けるのが施設の役割だから、取りあえず来い」と。そのとき、でも、お金も何もなかったんで、「お金ないですけど、いいですか」って言ったら、「お金のことは心配するな」って言ってきて。そこからダルクに3年ぐらい入寮してましたかね。当時の高知ダルクの男性の寮は、安芸にあったんですよ。海沿いに建てられてた3階建てのぼろっぼろのビルで。でも、立地は良かったんです。あそこ、最高だったなって、今、思うんですけどね。建物全体が何となくおしっこの臭いがするんですよ。しょんべん臭いビルで、1階がミーティング所、2階が事務所とご飯食べる場所、3階がちょうどこれぐらいの大きさの畳がばーっと敷いてある。雑魚寝するところで。以上って感じの施設で。みんな、そこに布団1枚与えられて、布団をみんな並べてそこに寝てるっていう。

今は、何て言えばいいのか、いろんな規則っていうんですか、国から援助をもらって今は施設を運営したりとかしてるんで、一人1部屋じゃないといけないとか、そういう雑魚寝は駄目だとか、いろいろ規則があるらしいんですけど、当時は、でも、ああやっごろごろ寝てる感じが僕は好きだったんですけどね。

その雑魚寝してる場所の横に、ここの教室と同じような掃き出しの大きい窓が一面あって、その窓が全部いつも全開で開けられてて、窓の外にばーんと海が広がってて。環境が良かったなと思いますけどね。でも、一人1部屋じゃないから、みんな、ごろごろ寝てるから、仲間の中にはおかしな奴がいて。おかしな奴ばかりなんですけど。基本的にみんな狂ってるからね。狂ってる人たちの集まりだから、夜、寝たら、人がそばに立つ気配がして、ぱって目開いたら、仲間がおしっこしようとしてるんですよ、僕に向かって。で、「え？ ちょっと、ちょっと」って言って起こしたら、夢遊病だったみたいで「ごめん」とか言ってたけど、「ごめんじゃないよ」って言ってね。そんなことが毎日、起きてました。面白かったな、でも、あの施設。責任者って言えばいいですか、施設長の仲間は、朝一来ると1階のミーティング場の自分の席に座って。1日中そこに座ってるんですよ。ずーっとあそこに座ってたの、あの人。なんか、仕事してなかったんだよね。後で分かったことなんですけど、当時、施設長はすごいひどい病だったみたいで、それぐらいのことしかできなかったんじゃないのかなと思いますけど。でも、なんか思い悩んだりとか、俺、これからどうすりゃいいんだ、みたいなことを考えたときとか、迷ったときとかには1階のミーティング場に行くと、施設長が座ってるので。責任者がね。「僕、これどうすればいいですか」って言うと、大体、短文で答えが返ってくる。一言ぐらいの答えが返ってくる。「まだ早いよ」とか、「そんなこと考えないで、仲間の中にいればいいよ」とか。そんな感じの施設だったんです。

メインにやってたプログラムはミーティング。今みたいに、今、こういろんな人に向かって話してますけど、そうじゃなくて仲間て輪になってみんなで体験談を話すっていう。昔、ああだった、こうだった、今はこうだ、これから先はこうだっていうような体験談を正直に話すっていうことを。

そのことをミーティングって言うんですけど、そのミーティングを1日3回、スリーミーティングっていう地獄のようなプログラムで、1日3回のミーティングを3年間やり続けました。狂ってるよなって思いますけどね、今、振り返ると、何を言ってもミーティングだ、ミーティングだって言われて、「おなか痛いんですけど」、「ミーティングに出て話せば治るぞ」とか言って、それとか、「虫歯があります」、「ミーティングだ」、「風邪引いて熱が出ました」、「じゃあ、ちょっと遠いミーティング場だ」とか、そんな感じだったんです。だから、病院も1、2回しか行ったことなかったな。一回病院に行ったかなぐらいの感じです。12年前ぐらいか、それが、当時はまだそんな感じだったんですよ。ミーティングばかりずっとやって3年過ぎて。

施設に入寮するまでに薬を止めようと思って、さっきも話しましたが、本気でみんな薬を止めようとは1回は思うんですよ。俺、もうこんなことしてられないなっていうか、止めようと思うっていうか、止めざるを得ない限界ぎりぎりのとこまでいくんですよ。止めるか死ぬか、みたいなとこまでいっちゃうからどうしても止めようと思うんだけど止められないので、いろんな方法、手段を使って止めようとするんだけど、でも、止められないっていうことをずっと繰り返してきたのに、高知へ来てダルクに入寮したら、ぴたっと薬が止まったんです。これ、僕、専門家じゃないので、どういうメカニズムなのか全くよく分からないんですけど、あれほどまでに止められなかった薬が、仲間と共同生活をするというだけで薬が止まったんです。止まるんですよ、これ、実は、仲間の中において話をしたり、正直になったり。要は、さっき先生も言ってましたけど、同じ立場の人の中において、その人たちを助けたり、助けられたりするっていうだけで薬は止まるんですよ。

でも、薬が止まり始めて3年がたって、3年も入寮して生活していると、だんだん諦めてくるんですよ。もう俺、ずっとこれでいいやって。生活保護でね。毎日スタッフがお金くれるし。1日1600円とか1800円だったかな。毎日スタッフがお金くれるし、特に何も考えないで過ごしていけるし、仲間の中にいたから楽しかったし。もうこれでいいやと思ったんだけど、その責任者、施設長が、「いつまでおまえ、ここにいるんだ」と言われて、その人に、いい加減に出て行って。それでしょうがなく退寮して仕事を始めたのが8年前ぐらいですかね。

そこから、NAっていう自助グループがあって（注1）、ダルクとはまた違うところなんですけど、その自助グループ、夜のミーティングだけで過ごして、普通に仕事をしてました、会社員をね。でも、あの仕事就くときも大変だったです。履歴書、書いたことがなかったんですよ、それまで。履歴書の書き方、分かんなくて。教えてもらって一生懸命、書くんだけど、履歴書に空白の期間ができるじゃないですか。捕まっていた時期と、薬を使っていた時期と、施設に入寮していた時期。それ、それ薬物事犯によりどうのこうのとか書けないっすよね。書けないから空白のまま書いて持ってくと会社では面接官がやっぱり質問してくるわけですよ。「マフネさんはどうして高知へ？」とか。うまく説明できないんですよ。正直になつたれ、みたいなね。正直になるプログラムっていうのをそれまでずっと徹底的にやっていたから、嘘はつかんほうがいだろうと思って、実は薬で逮捕されて、どうのこうの、こういう経緯で高知へ来ることになったんですっていう話をするのと落ちますよね。普通に採用されないもんね。アルバイトも落ちる。普通の会社員とかじゃなくてもね。だから、生活保護から抜け出すためのアルバイトを見つける。それがけっこう、大変で、14、15社ぐらい連続で。普通のアルバイトですよ。コンビニとかガソリンスタンドとか、そういうの落ちて。心が折れかけたときに仲間と相談したら、「生きていくための嘘はついていいんじゃないの」と言ってくれて、そこから嘘をつくようになりましたね、また。経歴に関してね。履歴書にも嘘を書いて。そうしたら1個受かったんですよ、バイト。アルバイト受かって、そこで7カ月ぐらい働いたかな。肉体労働のバイトだったんですけど、7カ月ぐらい働いて。でも、体もしんどかったし、肉体労働やってミーティング行って、みたいなことがけっこうしんどくて、普通の会社員、普通の

仕事、正社員の仕事を探してたんですよね、ずっと。そしたら、うまい具合に前やってた仕事と同じような仕事が見つかった。捕まるときに、すごい話がさかのぼっちゃうんですけど、もともと撮影とかの仕事をしてたんですよね、僕。映画とかコマーシャルとか、あと、プロモーションビデオとかの撮影をする仕事をして、それに似た仕事が高知で見つかったんですよ。これ、できるんじゃないかなと思って面接を受けに行って、履歴書も今までどおり慣れ親しんだ嘘を書いて履歴書を出し。自分の中のストーリーみたいなのもそのときにはちゃんとできてたんで、それを面接官の人にずっと話してたんですけど、なぜかその面接のときに面接官の人たちと話しているときに面倒くさくなっちゃったんですよね。そうやって話を作るのが面倒くさいと思って、「すみません、ちょっと待ってください。今まで僕が話した話は全部嘘です」って言って、実は僕はこうなんですよっていう話をそっからずっとしたんですよ。今、みんなにしてるような話を面接官にしたんですよ。そしたら、受かったんですよ、なぜか。なんだかよく分かんないけど。

会社のほうでも依存症者を社員として迎え入れるのは初めてのことからってんで、人事部の部長さんが高知ダルクを見に来て施設長と面談してました。施設長も面接終わった後、うまくいったかな、みたいな、「うまいこと、ごまかしといたから大丈夫だと思うぞ」とか言って。で、受かって、そこで7年ぐらい働いてきました。高知の市内にある結婚式場みたいなところの中に入ってるスタジオで撮影の仕事をしてました。してたんだけど、コロナが始まってパンデミックになって、契約社員の契約の更新はいたしませんということになって、首になったんです。7年も働いたのにね。でも、普通の人たちの中で依存症者だということを公にしながらか働いていうのはけっこう、楽しかったです。オフィスみたいなところに、編集室に、みんなが使う冷蔵庫みたいなのがあって、冷蔵庫の中に飲みかけのワインとか入ってるじゃないですか。「こういうのはあっても大丈夫なの？」とか課長が言ってたりとかして。あと、ニュースとかで芸能人が捕まるたびにみんな、僕に質問しに来るっていう。「なんでこの人たちは捕まっちゃうのかね」とか言って。いや、知りませんよ、みたいな。楽しかったですね。自分がどんどん認められてるみたいで。そんで辞めることになって、コロナウイルスで退職することになって。フリーランスで働いていこうと思ったんですけど、やっぱり写真だけだと食えなくなっちゃって。それで、今、高知ダルクで職員として働かせてもらってるっていう感じです。

今の僕の体験談は薬を止め始めたところから今に至るまでの思い出せることを時系列でずらずら言ってたんですけど、薬を止めるか、止めないかっていう話が、後半、ほとんど出てこなかったと思うんです。ある程度、薬が止まると、生き方の問題とかっていうことになってきて、薬を止めるとか、止めないとかって問題じゃなくなってくる。そうなってくると、自分自身だけの問題ではなくて、環境の問題っていうのも出てきちゃったりとかして。たまたま僕が働かせてもらったところは理解あるところだったのかどうか分かんないですけど、高知ダルクまで面接しに来てくれたりとか、人には恵まれたと思いますけど。だから何を言いたいかっていうと、僕らは当事者だけど、みんなは当事者ではないわけで。さらにみんなはその環境の中の一部になる人たちなわけじゃないですか。だから、体験談を聞いて、わあ、大変だなとか、けっこう、壮絶な人生だなとかいう感じで自分とは関係ないところで起きているえらいこと。この人たち、大変な人たちなんだ、みたいな感じで終わってほしくないなっていうのは思いました。それが伝えたいことかな。えらい時間残っちゃってますけど、大丈夫ですか…(中略)…以上です。ありがとうございました。

【宮本容子さん】

自分の話はいろんなところでたくさんしたので。あんまりそんなにみんなと変わらず、16ぐらいで薬を使い始め、34まで、1日倒れてるとき以外は毎日、薬を使い、薬てん[=薬物てんかん]を起

こすようになって、薬を使っても薬てんを起こすし、薬が切れても薬物てんかんを起こすしっていう状態になって、もう薬は使えないなっていうところで…（中略）…そのときにちょうど『おはようジャーナル』. 34歳のときなので、今、67だから…（中略）… 33年前ですね。その頃、『おはようジャーナル』っていうのがやってて、そこでせき止め [=せき止め液乱用] の人が入院してるっていう話をしてて、入院して、止めてもいいんだ、みたいなことが分かって、うちの母親が精神保健センターに相談に行くんです。精神保健センターの当時の所長さんがこの病院行くといいよって教えてくれて、その病院にたどり着くまでに何カ月かかりました。まずは病院の前をうろろうして、ここか、みたいな。その次は電話して、先生か、みたいな。それからやっと病院に行って、「薬抜きたいんです。でも、離脱症状ひどいので、体中、痛いし、何とかしてください」って言ったら、先生は「かわいそうだね、何とか閉じ込めてあげるから来て下さい」っていうことで、病院の病室が空くまで。何しろ閉じ込めないといけないので。鉄格子が入ってガッチャンって鍵がかかるところを空けないといけないので待ちました。その間も先生は「かわいそうだね」って言いながらも一緒に付き合ってくれました。そこから私は自助グループに通い始めます。

当時のその 30 何年前の先生は、病院は解毒しかできないと。あとは自助グループを見つけてきてくれて。その当時、自助グループの 2 人、メッセージに来てくれたんです。そこで自助グループに通うようになって、あとは自助グループで頑張ってくださいっていうのが先生でした。それは、とても、当時、すごい進んだ考え方かなって思います。当時はもう薬を止めるか、止めないか、2 択しかなかったですね。止めない人は使い続けて死ぬみたいな、そんな選択でした。

それから私は自助グループに通い始めて、薬が止まって、NA を始めて。女性のミーティング場も始めて。でも、女性のミーティングだったって、薬物依存症の女性がなかなかいないんです。アルコール依存症の女性もなかなかなくて、女性がいない中で数年やってて、私は、仲間が欲しいと県外に行くしかなかったんです。仲間に会いに行くために。県外に 2, 3 カ月に 1 回、女性の仲間を求めて行くっていうことをしてました。そのうち、私、子ども二人いるんですけど、二人とも取りあえずは就職っていうところまでこぎつけて、もう私は自分の好きなことをやっていいなって。取りあえずは学校は出たしっていうところで施設を始めることにしました。それは仲間が欲しかったからです。女性の仲間が欲しくて、そうするには施設をやるしかないなと。通所の施設だと人が高知県にそんなに出不ないので。たくさんいるはいるんですけど、多分。いるんですけど、出てこなかったの、やらないと駄目だと。当時、私のスポンサーになってくれた。スポンサーっていうのは、薬物を止めていく上でぶつかる問題、一緒に考えて一緒に歩いていきましょうっていう方なんですけど、その方も東京で施設をして。で、施設やりたいんですっていうことで施設を始めました。それが 2006 年ですね。南国 [=高知県南国市] に 4 人の施設をスタートしました。その頃、お金なくて。やっぱりお金ないんですね。仕事、私、してたので。ただ、お金に私は縁がない人で、いろんなところに行くのにお金を扱ってたので、貯金もなく、とりあえず当時勤めてた会社のボーナスをもらって、雇用保険のお金ももらって。それから、男性の施設があったので、男性の施設の会から 20 万円くらい、ともかくお金をいただきました。それで何とかしのいで。

入寮者は 8 月の終わりに会社を辞めて、9, 10 月の頭には入寮する仲間が来ました。その仲間たちと病院に行ったりとか、いろんな男子会のミーティングに行ったりとか。昼間、2, 3 人とかなので、同じ話を朝から晩までしてるので、大概にだいたい覚えてきます。この人こういう人生だったんだなみたいなことを覚えてきます。トークをしてるうちに満杯。満杯つっても 4 人なんですけど、4 人じゃ少ないなと。朝から晩まで自分の話をしていると、4 人だとそれで終了なので、もうちょっと広がりたが欲しいと、もうちょっと大きい施設に変わりたいと。で、今のとある場所の施設に変わりました。そこは自立準備ホームが二人入れるので全員 8 人の施設ですね。そこを借りて民間の施設

を始めました。でも、お金がないんです。みんな生活保護で。私はそれをその箱を維持していく、みんなの話を聞いたり病院に連れてったりっていうことに集中するのにお給料がないと。当時 8 万円ぐらいだったんですけど、8 万円で生活できたので、そのお金を何とか工面しないとイケない。でも、みんな生活保護なので、そんなお金は出ないです。入寮費が 14 万円とか払える人が一人でもいたら何とかなるんですけど、それもいなくなり、1 年ぐらいはお金がない。で、借金していく生活をしてました。その話を高知ダルクの施設長とか三重ダルクの方とか他のダルクの人たちが、本当にお金なくなるよねっていう話をしている、障害者支援法の法内施設にしたら、お金が入ってくるので、何とか職員としてのお金が出るんじゃないかっていうことで、生活訓練の施設を始めました。生活訓練の施設は、ただ、通常 2 年ですね。延長申請をして 3 年間しか利用できません。女性の回復って 2 年や 3 年ではどうにもならないんです。その後、社会生活の経験がある方たちは普通の。普通のつっただけいけない。他の B 型作業所とか障害者枠での雇用とかで働くことができるんです。

でも、まだ仲間の中にいて回復、成長を遂げたいっていう仲間たちは 2 年や 3 年ではどうにもならないので、そこに居続けます。そうすると、人は増えるけどお金はできないっていうことが起こり、3, 4 年いても同じことをずっとやってくるので、次のステップに進めない、社会へ近づくことができないっていうところで、去年、三重ダルクとか沖縄の…(中略)…方とか、いろんな方の支援をいただいて。助成金をいただいて。で、カフェを始めることにしました。カフェは今年の 1 月からオープンしてはいます。また後で資料を渡すので、皆さん、ぜひご飯を食べに来てください。酵素玄米。体を整えるご飯っていうのを出しています。という一連の流れで、カフェを卒業した人たちが今度は社会に出ていくって流れができました。でも、あと一個足りないのが、そのカフェに集まる、カフェで作業をして工賃をもらって少しだけ社会の仲間入りをしている人たちが高知市内に住むところですね。そこがあれば、一応、スムーズに回っていくのかなって思います。

なんでみんな良くなっていくのか、さっき、疑問っていう話が出たんですけど、グループでお互いが手に手を取り合ってすごい良くなっていくんです。それはすごく不思議な力が働いて、みんな。何て言ったらいいのかな。奇跡的なことが起こって良くなっていきます。ちょっと前は大学出た方が多かったです。大学出て留学してっていう方がいました。その次はアーティストたちがいっぱいいます。不思議なことに、割と似た感じの仲間たちが集まってきます。なんでそうなるのか、全然そういう方を募集してるわけではないんですけど、たまたま来る方たちがそういう感じになっていってます。だから話が合ったりとかするのかなって思うんですけど、その中で何だかは知らない力が働いてみんなが良くなっていくんです。今回、また新しい仲間たちがぽつぽつとやってき始めて。アーティストたちですね、今回、来てる仲間たちは。どんなふうになるのかなって、私はすごく興味津々でいます。

ここにお話聞いてもらえてる方たちっていうのは作業療法士さんの卵で、施設にたどり着いたときの女性ってけっこうぼろぼろなんです。整形外科、産婦人科、もちろん精神科、皮膚科、歯医者、いろんなところへ行きます。それは付き合います。取りあえず、痛いとかいろんなことを訴えてくるので、来た当初、いろんなところに付き合います。いろんな病院に行って頭から足のつま先まで調べるんですけど、分からない。先生たちは分からない。だから、原因が分からないんです。でも高熱が出ます。夜中に 9 度とか出て救急の病院に行きます。次の日に全身調べてもらって、その次の日も調べてもらって。でも、原因が分からないですっていう、そういう原因不明の痛みとか、むくんでるとか、いろんなことが起こります。もちろんそれは数年にわたる薬を使った生活のために体の機能はかなり狂ってるし、誤作動を起こしてるし、おかしくなってます。それをそのまんま一緒に付き合っていくと、1 年でだいぶ良くなって、2, 3 年たった頃には、あれは何だったんだろう

って感じで消えていきます。もちろん、その後も後遺症が残ったりとかします。一時期は、例えば、腕がもうコンパートメント症候群で動かなかった人とか、松葉づえを突いてる人とか、飛び降りて、体、こっち半分まひして神経がつぶれちゃってるので、治らないです。でも、リハビリで何とか歩けるようになって、施設に入寮してる間に松葉づえは取れました。でも、体の不具合を抱えています。

そういうふうに薬物を数十年使ってきた仲間たちっていうのはメンタルのほうもやられてますけど、体もメンタルと共におかしくなってます。そこんところを気長にサポートしてくれたらなって思います。今の施設では動作法っていうのを講師の先生に来ていただいてやっています。それは本当に見る見る体が変わります。でも、またすぐ元に戻ります。そのやっていただいているときは足の長さがこんな変わったりとか、傾いてる体が変わったりとかするんですけど、すぐまた元に戻るの、それを1週間に2回来てもらって立て直しをします。体が良くなると心も良くなるし、心が良くなると体も良くなるっていう、密接につながってるので、ぜひ体からのアプローチを私たち依存症にもやってもらえたら、すごく助かるかなって思います。

あと、今、私たち高知ダルクの抱えてる問題っていうのは、若い方たちですね。少年院を出た。10代で少年院に入ります。その後、薬を使いながらずっと生きていってるので。さっき話した方はいなかったかな、30～40代、刑務所の行き帰りをしているっていう。それを何とか10～20代のうちに違う道もあるんじゃないかっていうことを知ってもらいたいっていうことで、若い仲間たちが来たとき、20歳前後～20代前半。本人が出たいって言えば、行ってらっしゃいと旅に出てもらいます。で、また帰ってくる。また過ごします。また出て行きます。すごくいい環境とは言えない社会生活なんですけど、ヤクザがいっぱいいたりとか、薬使ってる人の…(中略)…たちとか。でも、その中でも行政の方だったりとか、病院の方だったりとか、支援者だったりとかっていう方たちに出会えます。そういう中で違う道があるんだっていうことを知ってもらえれば、自分が、もし、本気でやめたい。いつも、止めたいと思って来るんですよ。ただ、来るんですけど、また外の世界が懐かしいっていうか、外の世界に出て行きます。それをやりながら10年ぐらい先に本気で止めたいと思って、30代くらいで施設につながってくれば、その後の30～40代を刑務所の行き帰りで済まさなくていいし、30代で薬が止まれば、違う道が開けるかなって思ってた、そのことを、今、やりたいなって思ってます。

だから20代の人たち、10代の後半っていうのは、ものすごいエネルギーがあります。はちゃめちゃなエネルギーがあって。それに付き合っていけるだけ付き合っていくっていうことをして。これ、今やってることは効果があるのかどうなのかっていうのはまだ分かりません。10年たってどうだったっていうことが出てくるとは思うんですけど、今、私、施設17年目です、施設を始めて。出たり入ったりしながらも薬から遠ざかって社会に出られる人たち、仲間たちが高知の市内でもぼつぼついて、サポート体制もあるのかなって思います。

それと、自分たちが目指してるのは、一人でも多く薬を治療代わりに使うではなくて、別のつえを用意すること。話をすることだったり、一緒に歩くことだったり、たくさんサポートの仲間たちを増やしていくこと。それは病院のワーカーさんだったり、本当に今、いる作業療法士さんだったり。中には数名の方はリハビリに通ったりします。リハビリに通いながら、いろんな話をして支えてもらってます。私もリハビリに通いますっていうか、どんなことしてるのかなとか、どんな先生かなとか、いろんな話をしながら支えてもらってる仲間たちが数人います。だから、薬物依存症も病院でとかっていうところでは会おうと思います。そんなときに自己治療のために薬を使った場合もあるし、全く私みたいに好奇心で使ってしまった場合もあるし。でも、命懸けでみんな、薬を使います。その結果いろんな痛みが出て。でも、本人、何とかしたいと思って施設に入寮します。

施設に入寮するときってというのは本当に何もかも身ぐるみ剥がされるっていうか、何にも持てないです。お財布も持てないですし、携帯も持てないですし、そういう期間を数カ月。1, 3カ月とか過ごします。音楽もみんなと一緒にじゃないと聞けないしっていう。アクセサリ類も全部駄目です。化粧も駄目です。よそ見をしないように。外部との通信も施設の職員を通じてじゃないとできないです。そういう全ての物を投げ打って、薬と縁を切るために過ごします。それが2, 3年と続いていって社会に巣立って行くっていうのがダルクの仕事かなって思います。

だから、私たち、出会った以上、本人が望めば、ずっと付き合っていこうって思ってます。生きていく上で薬に頼れない人生を送るようになったので、いろいろ悩みます。もちろん自助グループも支えになるし、私みたいに持ってるスポンサーも頼りになるし、支援者の方だったり、病院の方だったりっていういろんな方のサポートを受けながら、社会の中で。本当に有能な方たちなので、能力はたくさんあります。それを生かせるように、私たちは若いうちから何とか違う人生、違う道を見つけてもらえればなって。それも自分の意思で自分が望んでダルクにいるっていう形でできていったらいいのかなって考えてます。

注

- (注1) 薬物依存者の自助グループ **Narcotics Anonymous** を指す。通称は **NA** 又は **Nar-Anon** (ナラノン) である。2023年7月31日現在、インターネット上で **Nar-Anon Family Groups JAPAN** の HP (<http://nar-anon.jp/naranon/naranon.html>) が確認できる。

令和5年(2023)10月16日受理

令和5年(2023)12月31日発行